

## 企画展

# 三島のあけぼの

・昭和61年以降発掘の埋蔵文化財・

◀観音洞遺跡出土  
吊手土器



475ヶ所の埋蔵文化財包蔵地を持つ私達の郷土“三島”は歴史の宝庫です。

箱根山西麓の広範な丘陵地には旧石器時代や縄文時代の遺跡、市域の南部に広がる田方平野やその周辺には弥生時代、古墳時代、平安時代などの遺跡が数多く分布していることが確認されています。また、三島市街地や旧街道沿いの地下には、奈良・平安時代の寺社跡をはじめ、中世戦国時代から近世街道時代に至るまでの豊かな歴史が眠っています。

このように多くの埋蔵文化財包蔵地に対して、三島市教育委員会では、これまで年ごとに、計画的な発掘調査のメスを入れ、そのつど調査報告書

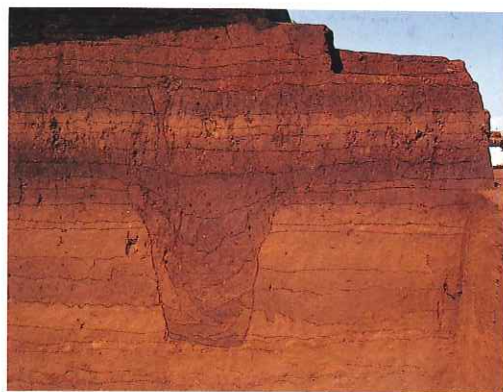
を作成し、地域古代史解明のための資料の集積をしてきました。そして、昭和61年には、それまでの調査発掘の成果を公開展示する意味で、三島の埋蔵文化財展「三島のあけぼの」を開催したのです。

本展示は、この展示に継続させるもので、昭和61年から63年にかけて行った約50回の調査発掘の中から旧石器時代から近世までの各々の時代の代表的な遺跡と遺物を選んで企画展示したものです。

それぞれの遺物は、私達の郷土“三島”の歴史を、誰よりも、何よりも雄弁に語ってくれます。古代ロマンの旅を経験していただけたなら幸いです。

# ど とう 坑 群 を 発 見

## ——旧石器時代・<sup>はつねがはら</sup>初音ヶ原A遺跡——



▲土坑断面写真

### ▲土坑

初音ヶ原A遺跡は、国道1号線沿いの旧街道松並木の西側に広がる標高約97メートルの丘陵地にあります。A遺跡に隣接してB遺跡があり、昭和61年11月に、わが国最古の27,000年前の土坑4基が発見されています。

A遺跡は第一文化層から第三文化層まで三層の文化層が見つかり、第一文化層からはナイフ形石器、礫など、第二文化層からは石器の他に礫群と呼ばれる礫の集中する遺構が2基発掘されました。第三文化層からは9基の土坑群が発見されました。

土坑は、地表から約2メートル下の、約27,000年前の腐蝕土層「第三黒色帯」の下辺部あたりから掘り下げられていました。各土坑の深さは115センチ～165センチ。直径は開口部が102センチ～145センチで底へ行くほど狭くなり、底辺部の直径は47センチ～66センチでした。9基は7メートル～15メートルの間隔で、全長約75メートルにわたり、緩い円弧を描くように配列されていました。

一連の土坑群の謎について、発掘調査を行った人達は、次のように推理しています。

「墓穴にしては深すぎ、人為的に埋葬土を被せた跡が見られない」

### ▼13号土坑、完全に掘り下げた状態

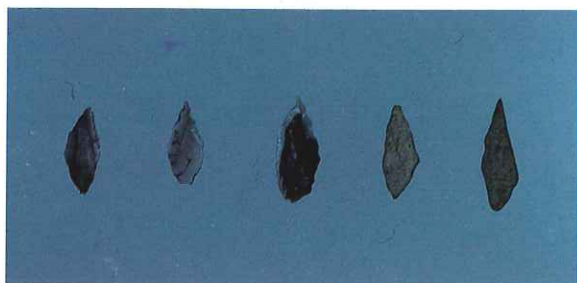


「貯蔵の穴なら、土坑内部から木の実や種子が見つかってよさそうなものだが、それが発見できない」

「したがって、一連の土坑の配列の様子などから考えると、落とし穴の可能性が強い」

とすると、B遺跡から発見された4基の土坑も合わせると全長100メートルにもなる土坑列で、これは全国的にも珍しい大規模な落とし穴群ということになります。

旧石器時代の人々は、これらの落とし穴に、どのような動物を追い込み、捕らえていたものでしょうか。



◀ナイフ型石器

# 三嶋明神の遺物

## ——鎌倉時代・三嶋大社境内遺跡——

三嶋大社境内の発掘調査は、当初奈良時代白鳳期の寺院跡「塔の森廃寺」を発掘する目的で進められましたが、第一次及び第二次の調査においては、それらしき寺院の跡の発見が出来ませんでした。

本調査で発見されたのは、**中世の土坑36基**

**遺構**と、その中に廃棄され残った多数の瀬戸、常滑などの**陶器**とかわらけでした。おそらく、鎌倉時代以降の数百年にわたる、三嶋明神のさまざまな**祭祀に用いられた道具類**の**残片**であろうと思われます。



◀江戸時代の建物の礎石跡(数個の石を均等に並べて柱の礎石としている) ▶鎌倉時代、かわらけ



# 兵どもの夢の跡

## ——室町時代・山中城——

山中城は、小田原の北条氏の**出城**として築城され、天下統一を目指す豊臣秀吉により天正18年(1590)に攻撃を受け、わずか半日で落城しました。

三島市教育委員会では、昭和48年以来、この**中世を代表する山城**、山中城の復元整備のための発掘調査を継続してきました。

発掘調査は、今年で第14次調査に至り、これまでの成果は膨大なものとなりました。特に、山中城の全容にほぼ近い復元がなされ、その跡は史跡公園として親しまれているところです。

また、こうした復元のための発掘調査にともなって出土した遺物も多く、それらの一点一点は当時の戦闘の様子や、あるいは人々の生活を想像させるものであり、城の遺構と同じように貴重な資料です。

山中城の調査はまだ続きます。最も最近の14次調査では、古い文献の記述を裏付ける**二の丸跡が確認される**など、次々と新しい成果を得ています。



▲山中城 航空写真(上部より、西の丸、とり囲むように障子堀りがめぐらされる)

# 縄文人の狩猟・採集地か

## ——縄文時代・<sup>かん のん ぼら</sup> 観音洞遺跡——



▲発掘状況（グリッド調査法——5 m 方眼の中に3 m 四方の調査穴を掘り出土状況を調べる）

観音洞遺跡群は、箱根山麓の中ほど、国道1号線から約1キロメートル北へ入った元山中集落の東側に位置します。標高約400メートル。この地点からは、三島市街地をはじめ、西は富士市から南は函南町までが一望できます。

観音洞遺跡群の発掘は、約1年をかけて、No.1遺跡からNo.10遺跡までの合計10地点の調査が行われました。その結果、この遺跡から発見された縄文時代の遺構や遺物は次のようなものでした。

遺構では土坑が目立ちます。<sup>しゅうせき</sup>集石土坑、<sup>おとし</sup>落とし穴状土坑などの多数の土坑は、この地が縄文人達の狩り場であったことを物語っているのでしょうか。少数ながら、住居跡も見つかります。この集落が、定住集落だったのか、狩り・採集のためのキャンプ地であったかは分かりませんが、住居跡の発見は、古代人の温もりを感じさせてくれる発見でした。

遺物のなかで、土器には約5,000年前の<sup>たけ</sup>竹管文を持つ土器や約6,000年前の<sup>おし</sup>押形文・<sup>じょう</sup>条痕文の土器が発見されました。石器では、矢じり、<sup>いし</sup>石斧、<sup>あらいし</sup>磨石など多数が出ています。

数ある遺物の中でも特筆すべき土器は、静岡県内では、裾野市の細山遺跡、大仁町の仲道A遺跡に次いで三例目の発見とされる<sup>ぶし</sup>吊手土器です。吊手土器は火をとますために用いられた<sup>まじない</sup>呪術的な祭器と思われま

素焼きの土器で、高さ幅ともに20センチ。全体に縄文時代特有のダイナミックな装飾が施され、内面には煤が付着して火気使用の<sup>あと</sup>痕跡をとどめています。

このように、ほぼ完全な形で発掘された例は珍しいことです。

▼3号住居跡、完全に掘り上げた状態(中央—石囲い炉、上—磨石と石棒、穴は柱跡)



# ほう けい しゅう こう ぼ 方形周溝墓

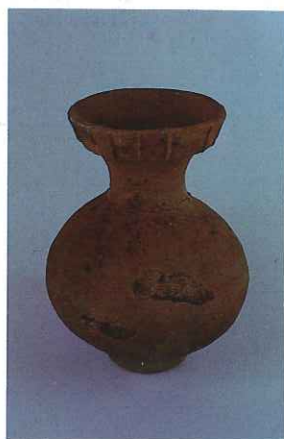
## ——弥生時代・青木遺跡（第2次調査）——



▲方形周溝墓，周囲の溝に土器が出土する



▲台付甕



▲壺

青木遺跡は、田方平野の中央部北よりに位置する標高17メートルの三島扇状地上にあります。遺跡の東西には、御殿川と源平川が遺跡を挟むように南へ流れています。この両河川沿いは、弥生時代から平安時代にかけての多くの遺跡が分布するところです。

青木遺跡の発掘調査は、昭和

46年に三島市教育委員会が一度行っています。当時は小規模な調査ながら溝や多数の土器を発見していて、その結果そこに10mほどの四角に囲んだ溝によって作られた方形周溝墓群があることを指摘していました。

昭和62年度の発掘は、いわゆる第二次調査で、方形周溝墓(中期)1基、同(後期)4基及び

溝(中・後期)4基を発見し、弥生時代の墓の在り方を探る上での重要な調査となりました。

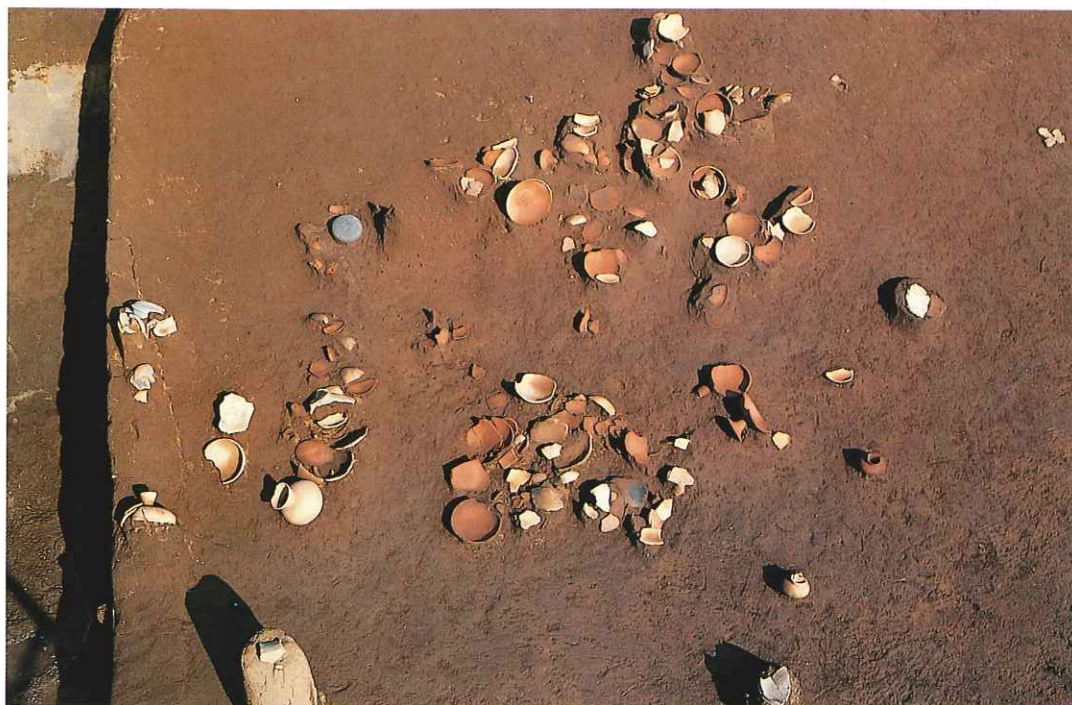
この遺跡からは、方形周溝墓の遺構と同時に、壺、甕、ガラス玉など多数の遺物も発掘されて、この辺り一帯に住んでいたであろう水田耕作の弥生人たちの暮らしぶりを解明する手掛かりとなっています。



◀方形周溝墓、中央が主体部(遺体を安置した穴)

# 平地の集落

## ——古墳時代・安久遺跡——



◀河川跡より土師器が出土した



◀祭祀土器（左—かみ埴, 中央—たかづき高杯, 右—わん碗）



▲玉砥石（祭祀用装身具を砥いだものと思われる）

安久遺跡は、田方平野東側を南下する大場川の自然堤防上に在ります。下田バイパスを南へ下り、大場川橋の手前を左折した大場川沿いで、川向こうは函南町という三島市南端の地点でもあります。

ここは、過去何度も何度も川

の氾濫を繰り返してきたところで、ある時は河川流路そのものであったり、きわめて低湿地帯でした。それにもかかわらず、こうした集落が存在し得たのは、当時の人々が、すでに土手を築き治水することが出来ていた証拠と言えるでしょう。

また、大量に出土した古墳時代なかごろの土器の中には、川岸で祭祀を行ったと思われる環、高環、埴などがまとめて捨ててある場所もあり安久遺跡が特別な祭祀集落であった可能性も考えられています。

# 重なる住居跡群

## ——奈良・平安時代・中島上舞台遺跡——

なか しま かみ ぶ たい

中島上舞台遺跡は、下田バイパスを南下し、中郷小学校前を左折、旧下田街道手前の北側、御殿川沿いの微高地上にあります。

三島湧水を源流とする御殿川は、蛇行南流しながら幾つかの微高地を形成してきました。そうした微高地は、人間が集落を造り、生活を営むには最適な所であるため、そこには幾世代にもわたる人々の営みの跡が残されています。

そうした集落の一つ、中島上舞台遺跡からも弥生時代から中世に至るまでの、複合する64軒もの住居跡群が発見されました。

中でも、奈良・平安時代の住居跡群はこれまでの発見例も少なく注目に値するでしょう。

また、住居跡から出土した土師器、須恵器、灰釉陶器などの日常生活の道具からは、当時の人々の暮らしぶりが想像されます。



▲カマド跡

▶御殿川が蛇行してきた半島状の微高地に発達した古代の集落跡



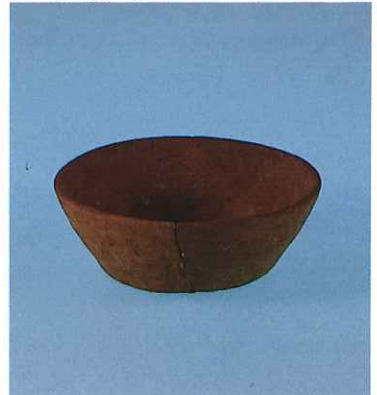
▼土師器，蓋



▼土師器，高台付杯



▼土師器，坏



# 脇本陣跡の発掘

江戸時代・山中宿

水戸屋銘茶碗  
(山中宿の旅籠)



山中城三ノ丸遺跡発掘風景(上部の井戸より水戸屋銘茶碗が出土した)

山中宿の発掘調査は、山中城三の丸跡発掘調査の中で行われたものです。

山中宿は、天正18年(1590)山中城落城の後間もない、慶長6年(1601)に、江戸幕府の街道宿駅整備に伴って三島宿と箱根宿の間に成立したものと考えられます。

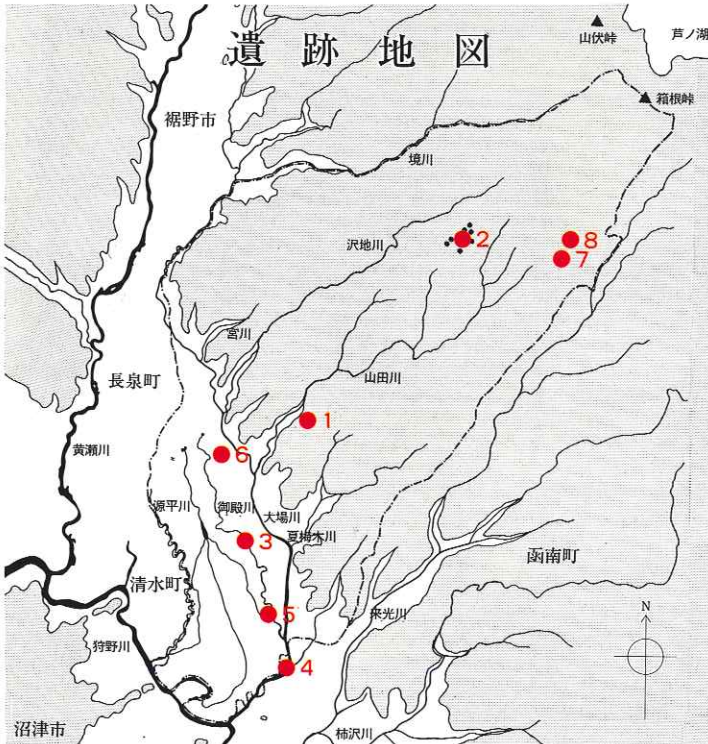
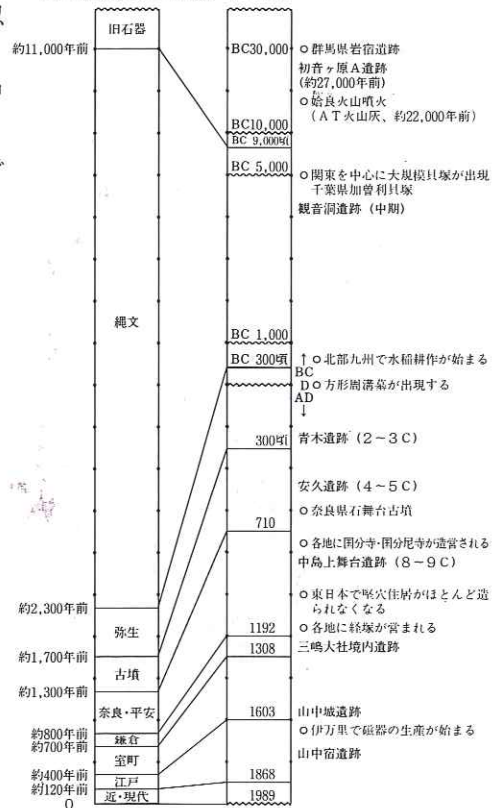
今回発掘が行われた場所は、山中宿のほぼ中間に当たる脇本陣「水戸屋」の跡でした。屋敷跡

や井戸からは「水戸屋」の屋号の入った伊万里焼きの御飯茶碗や皿などの陶磁器片が1,000点以上見つかりました。

これらの遺物は、江戸時代中期に、山中宿が繁栄していたことを示す重要な資料と言えるでしょう。

## 年表

(時代別長さの比較)(年表)



三島市の地形と調査遺跡の位置

1. 初音ヶ原A遺跡(旧石器時代)
2. 観音洞遺跡群(縄文時代)
3. 青木遺跡(弥生時代)
4. 安久遺跡(古墳時代)
5. 中島上舞台遺跡(奈良・平安時代)
6. 三嶋大社境内遺跡(鎌倉時代)
7. 山中城(室町時代)
8. 山中宿(江戸時代)

## 企画展「三島のあけぼの」

・昭和61年以降発掘埋蔵文化財・

平成元年10月30日～2年1月31日

三島市郷土館

三島市一番町19-3楽寿園内

TEL 0559-71-8228